

千葉県立中央博物館周辺鳥類目録

桑原和之¹⁾・原田 茂²⁾・木幡冬樹²⁾・鈴木 明²⁾
青木正志²⁾・落合加代子²⁾

¹⁾ 千葉県立中央博物館

〒260 千葉県千葉市中央区青葉町 955-2

²⁾ 千葉県立中央博物館友の会

〒260 千葉県千葉市中央区青葉町 955-2

要 旨 千葉県立中央博物館周辺に出現した鳥類は、1993 年 12 月までに 137 種に達した。舟田池の環境は 1990 年まで造成工事のため著しく変化した。1987 年の夏に水を抜かれ、1990 年まで浚渫工事が行われた。その間、池への注水後や雨水が一時的に溜まると、カモ類やバンなどの水鳥が飛来した。また、水がなくなり湿地が形成されると、すぐにサギ類やシギ・チドリ類などの採食場所になった。1991 年以降は池の水位も安定したため水鳥の種構成も安定した。同様に、陸上でも 1988 年から 1990 年まで、造成や植栽工事が繰り返されたため、陸鳥の生息環境としての二次林、植栽林、池の周辺などが、それぞれ短期的に著しい変化を繰り返し、陸鳥相の変化も大きかった。1992 年以降は陸鳥の種構成も安定した。

キーワード: 千葉県立中央博物館、生態園、鳥相、センサス。

千葉県内での鳥類の観察記録は多いが、その多くは散逸しがちで、統括して収集されていない。特に記録を漏れなく集めた、総合的報告は少ない。千葉市内で行なわれた観察や調査は県内の他の地域に比べて多いものの(桑原, 1993), 継続的観察に基づく鳥相が報告されているのは千葉県立中央博物館周辺にしかすぎない。

博物館や舟田池周辺の鳥類調査は 1982 年から始められ、1983 年と 1986 年にも調査が行なわれた(唐沢, 1984, 1987)。1987 年以降は毎年継続してセンサスが行なわれ、それらの成果はすでに公表されている(桐原ら, 1988; 青木, 1989 など)が、1991 年以降のセンサス結果や観察記録はまだ公表されていない。そこで、本報告では 1982 年から 1993 年までに観察された鳥類の記録をまとめ、博物館周辺の鳥相を把握することを目的とした。その主な内容は 1993 年までの鳥類相の変化と、記録された鳥類の目録、周辺地域の鳥類相との相違や類似性についての考察である。今回は主に鳥相の動向に付いて述べるため、種ごとの個体数の変化や解析は別の機会にまとめたい。

調 査 地

千葉県立中央博物館は千葉市中央区青葉町に位置している(35°36' N, 140°08' E)。調査地は宅地予定地や道路に囲まれており、博物館本館(以降、博物館)の南には生態園が一般公開されている(図 1)。調査地の中央には 1 ha の舟田池(以降、池もしくは st. 1)があり、水鳥の生息地となっている。池の周辺には、草地

(0.24 ha)がありヨシやハンノキが植えられている。また、池の周囲には自然状態のイヌシデ・コナラ・クヌギなどからなる二次林を中心とした保存林(st. 2 や st. 3)がある。st. 2 は 0.48 ha で st. 3 は 0.55 ha である。st. 4 は、北総・南総の自然としてタブ林、スダジイ林、アカガシ林、モミ林、アカマツ林、シラカシ林などの植栽林、ススキ草地などが展示されている台地である。この st. 4 は 1.59 ha を占め、1989 年 2 月の開館当初には裸地が目立った。せせらぎとスギ・ヒノキ林、イヌシデ・コナラ林、マダケ林などの植栽林地は 1.13 ha あり、st. 5 とした。せせらぎの流水が落ち込む地域の湿原は st. 6 とし、面積は 0.52 ha である。ハリエンジュなどの落葉広葉樹林(0.43 ha)を st. 7 とした。博物館は 1.3 ha でその周辺の園路(0.22 ha)を含む 1.52 ha の地域を st. 8 とした。また、博物館の敷地を取り巻く道路は 1.70 ha あり st. 9 とした。生態園の植物分類園や生態実験園は 0.84 ha であり、この地域は st. 10 とした。生態園の面積は 6.7 ha で、博物館およびその周辺の歩道や造成地(3.3 ha)を含めた調査地は合計 10ha である。

調 査 方 法

博物館周辺の鳥類相は、文献とセンサス記録によって把握することとした。センサスは全数調査とし、調査地における個体数を 10 ヶ所の調査区画ごとに分けて数えた。このセンサスは 1989 年以後、年間 50 回程行った。さらに、1990 年 4 月 1 日から野鳥観察舎に生態園相談員が常駐するようになり、4 月 6 日以降、

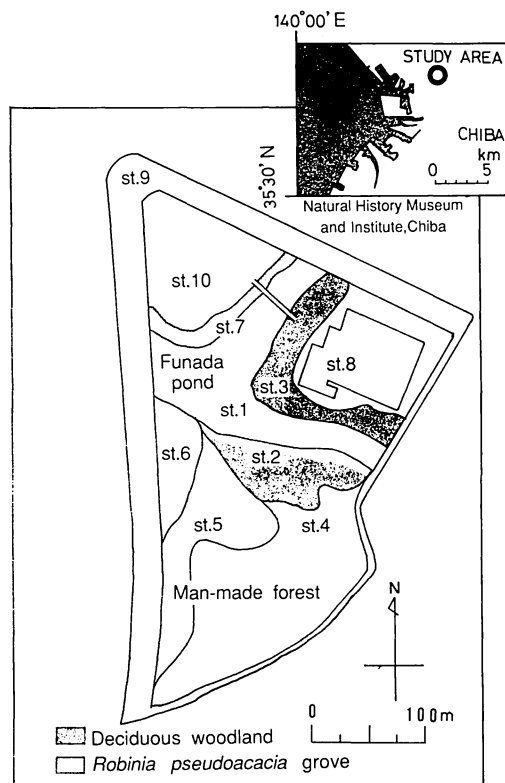


図 1. 調査地.

Fig. 1. Study area

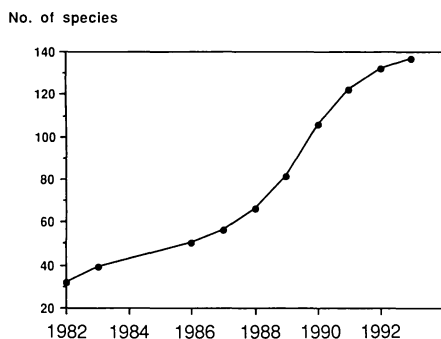


図 2. 調査地で記録された種数.

Fig. 2. Number of species recorded at study area from 1982 to 1993.

博物館開館日には野鳥観察舎周辺などで観察された鳥類の個体数を記録した。その際、種ごとの初認、終認、群れの大、小などを詳細に観察し、その記録を収集した。これらの記録は、従来、正確に集められることが少なかったため、記録の収集には正確を期した。また、調査地で鳥類を観察する人の数が増加するにつれて、上空を通過する鳥や、籠抜けした飼鳥の確認が増えた。飼鳥はセンサスの際の調査では記録されない場合

が多かったため、聞き込み調査の結果を目録作成に生かした。また、観察例数が少ない記録などは引用文献を明示し再録した。

結 果

1. 調査地で記録された鳥類

調査地では1982年から1986年までに50種、1988年までに66種(桐原ら, 1989)、1989年までに81種の鳥類が記録された(桐原ら, 1988; 青木・桑原, 1991)。1990年はそれに加えて25種が観察された。1991年はさらに16種が、1992年には10種、1993年には5種が記録され、毎年新たに追加される種は年々減少した(図2)。1994年1月から1994年の3月までに、新たに記録された種はなかった。1994年3月までの累積記録は137種である(表1)。その種構成をみると、スズメ目が多く64種を占め、次いでチドリ目が16種、ガンカモ目が15種、ワシタカ目が10種、コウノトリ目が8種である。その他の目に属する種は少なく、1~5種でしかなかった。

2. 環境の変化と鳥相の変遷

環境の変化と鳥相の変化について博物館が竣工されるまで(1982~1988年)、本館の施行が完了し開館した1989年、生態園で野鳥観察舎が開館した1990年および1991年以降の4期に分けて述べる。

2-1. 1982~1988年

1987~88年にかけて、池への注水や雨水の一時的湛水によって池の水位が上昇した時に、カモ類やバンなどの水鳥が飛来した。また、水位が低下し池底に湿地が形成されると、そこはサギ類やシギ・チドリ類などの採食場所になった。さらに、湿地に繁茂したイヌビエの群落はスズメやカワラヒワの群れの採食場所になった。1990年まで造成工事のため、池は環境の変化が著しく、排水、浚渫、浸水ごとに鳥相は変化した。1982~1990年のst.1での鳥相の変遷や池で記録された種の個体数変動は青木(1989a, 1990)にまとめられている。

陸上では、生態園整備のための土地造成や植栽が1987年12月から開始され、1988年の工事が最も大規模であった。このため1988年は陸鳥にとっての生息環境の変化が最も激しかった。

2-2. 1989年

1989年に新たに記録された種はアオサギ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ノスリ、アマツバメ、マミチャジナイ、メボソムシクイ、キビタキ、サンコウチョウ、ヤマガラ、オオジュリン、コイカル、オオハクチョウの15種であった。1989年に池の環境が大きく変化し、カモ類など水鳥の生息環境が増えたため、新たに記録された種の40%が水鳥であった。

表 1. 千葉県立中央博物館周辺鳥類目録 1982～1993 年

Table 1. Birds list around Natural History Museum and Institute, Chiba, from 1982 to 1993.

Podicipediformes	カイツブリ目	
Podicipitidae	カイツブリ科	
1. <i>Podiceps ruficollis</i>	カイツブリ	(R)
Pelecaniformes	ペリカン目	
Phalacrocoracidae	ウ科	
2. <i>Phalacrocorax carbo</i>	カワウ	(R)
Ciconiiformes	コウノトリ目	
Ardeidae	サギ科	
3. <i>Ixobrychus sinensis</i>	ヨシゴイ	(M)
4. <i>Nycticorax nycticorax</i>	ゴイサギ	(R)
5. <i>Butorides striatus</i>	ササゴイ	(M)
6. <i>Bubulcus ibis</i>	アマサギ	(M)
7. <i>Egretta alba</i>	ダイサギ	(R)
8. <i>Egretta intermedia</i>	チュウサギ	(M)
9. <i>Egretta garzetta</i>	コサギ	(R)
10. <i>Ardea cinerea</i>	アオサギ	(R)
Anseriformes	ガンカモ目	
Anatidae	ガンカモ科	
11. <i>Cygnus cygnus</i>	オオハクチョウ	(M)
12. <i>Aix galericulata</i>	オンドリ	(M)
13. <i>Anas platyrhynchos</i>	マガモ	(W)
14. <i>Anas poecilorhyncha</i>	カルガモ	(R)
15. <i>Anas crecca</i>	コガモ	(W)
16. <i>Anas penelope</i>	ヒドリガモ	(W)
17. <i>Anas falcata</i>	ヨシガモ	(M)
18. <i>Anas strepera</i>	オカヨシガモ	(M)
19. <i>Anas acuta</i>	オナガガモ	(W)
20. <i>Anas clypeata</i>	ハシビロガモ	(W)
21. <i>Aythya ferina</i>	ホシハジロ	(W)
22. <i>Aythya fuligula</i>	キンクロハジロ	(W)
23. <i>Aythya marila</i>	スズガモ	(M)
24. <i>Bucephala clangula</i>	ホオジロガモ	(M)
25. <i>Mergus albellus</i>	ミコアイサ	(M)
Falconiformes	ワシタカ目	
Accipitridae	ワシタカ科	
26. <i>Milvus migrans</i>	トビ	(M)
27. <i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ	(M)
28. <i>Accipiter nisus</i>	ハイタカ	(M)
29. <i>Accipiter gularis</i>	ツミ	(M)
30. <i>Buteo buteo</i>	ノスリ	(M)
31. <i>Butastur indicus</i>	サシバ	(M)
Falconidae	ハヤブサ科	
32. <i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ	(M)
33. <i>Falco subbuteo</i>	チゴハヤブサ	(M)
34. <i>Falco columbarius</i>	コチョウゲンボウ	(M)
35. <i>Falco tinnunculus</i>	チョウゲンボウ	(R)
Galliformes	キジ目	
Phasianidae	キジ科	
36. <i>Coturnix coturnix</i>	ウズラ	(C)
37. <i>Bambusicola thoracica</i>	コジュケイ	(C)
38. <i>Phasianus colchicus</i>	キジ	(R)

表 1. つづき
Table 1. continued

Gruiformes	ツル目	
Rallidae	クイナ科	
39. <i>Gallinula chloropus</i>	バン	(M)
40. <i>Fulica atra</i>	オオバン	(M)
Charadriiformes	チドリ目	
Charadriidae	チドリ科	
41. <i>Charadrius dubius</i>	コチドリ	(S)
42. <i>Vanellus vanellus</i>	タゲリ	(M)
Scolopacidae	シギ科	
43. <i>Calidris alpina</i>	ハマシギ	(M)
44. <i>Tringa ochropus</i>	クサシギ	(M)
45. <i>Tringa brevipes</i>	キアシシギ	(M)
46. <i>Tringa hypoleucos</i>	イソシギ	(M)
47. <i>Numenius phaeopus</i>	チュウシャクシギ	(M)
48. <i>Scolopax rusticola</i>	ヤマシギ	(W)
49. <i>Gallinago gallinago</i>	タシギ	(M)
Phalaropodidae	ヒレアシシギ科	
50. <i>Phalaropus lobatus</i>	アカエリヒレアシシギ	(M)
Laridae	カモメ科	
51. <i>Larus ridibundus</i>	ユリカモメ	(M)
52. <i>Larus argentatus</i>	セグロカモメ	(M)
53. <i>Larus canus</i>	カモメ	(M)
54. <i>Larus crassirostris</i>	ウミネコ	(M)
55. <i>Sterna hirundo</i>	アジサシ	(M)
56. <i>Sterna albifrons</i>	コアジサシ	(S)
Columbiformes	ハト目	
Columbidae	ハト科	
57. <i>Columba livia</i>	ドバト	(C)
58. <i>Streptopelia decaocto</i>	シラコバト	(M)
59. <i>Streptopelia orientalis</i>	キジバト	(R)
60. <i>Sphenurus sieboldii</i>	アオバト	(M)
Psittaciformes	オウム目	
Cacatuidae	オウム科	
61. <i>Calyptorhynchus magnificus</i>	アカオクロオウム	(C)
62. <i>Nymphicus hollandicus</i>	オカメインコ	(C)
Psittacidae	インコ科	
63. <i>Melopsittacus undulatus</i>	セキセイインコ	(C)
64. <i>Agapornis roseicollis</i>	コザクラインコ	(C)
65. <i>Psittacula krameri</i>	ワカケホンセイインコ	(C)
Cuculiformes	ホトトギス目	
Cuculidae	ホトトギス科	
66. <i>Cuculus saturatus</i>	ツツドリ	(M)
67. <i>Cuculus poliocephalus</i>	ホトトギス	(M)
Strigiformes	フクロウ目	
Strigidae	フクロウ科	
68. <i>Ninox scutulata</i>	アオバズク	(M)
69. <i>Strix uralensis</i>	フクロウ	(M)
Apodiformes	アマツバメ目	
Apodidae	アマツバメ科	
70. <i>Apus pacificus</i>	アマツバメ	(M)
Coraciiformes	ブッポウソウ目	
Alcedinidae	カワセミ科	
71. <i>Alcedo atthis</i>	カワセミ	(R)

表 1. つづき
Table 1. continued

Piciformes	キツツキ目	
Picidae	キツツキ科	
72. <i>Jynx torquilla</i>	アリスイ	(M)
73. <i>Dendrocopos kizuki</i>	コゲラ	(R)
Passeriformes	スズメ目	
Alaudidae	ヒバリ科	
74. <i>Alauda arvensis</i>	ヒバリ	(R)
Hirundinidae	ツバメ科	
75. <i>Hirundo rustica</i>	ツバメ	(S)
76. <i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ	(M)
77. <i>Delichon urbica</i>	イワツバメ	(S)
Motacillidae	セキレイ科	
78. <i>Motacilla cinerea</i>	キセキレイ	(M)
79. <i>Motacilla alba</i>	ハクセキレイ	(M)
80. <i>Motacilla grandis</i>	セグロセキレイ	(M)
81. <i>Anthus hodgsoni</i>	ビンズイ	(W)
82. <i>Anthus spinoletta</i>	タヒバリ	(W)
Campephagidae	サンショウクイ科	
83. <i>Pericrocotus divaricatus</i>	サンショウクイ	(M)
Pycnonotidae	ヒヨドリ科	
84. <i>Hypsipetes amaurotis</i>	ヒヨドリ	(R)
Laniidae	モズ科	
85. <i>Lanius bucephalus</i>	モズ	(R)
Bombycillidae	レンジャク科	
86. <i>Bombycilla garrulus</i>	キレンジャク	(M)
87. <i>Bombycilla japonica</i>	ヒレンジャク	(M)
Troglodytidae	ミソサザイ科	
88. <i>Troglodytes troglodytes</i>	ミソサザイ	(M)
Muscicapidae	ヒタキ科	
89. <i>Erithacus calliope</i>	ノゴマ	(M)
90. <i>Tarsiger cyanurus</i>	ルリビタキ	(M)
91. <i>Saxicola torquata</i>	ノビタキ	(M)
92. <i>Phoenicurus aureus</i>	ジョウビタキ	(W)
93. <i>Turdus dauma</i>	トラツグミ	(W)
94. <i>Turdus cardis</i>	クロツグミ	(M)
95. <i>Turdus chrysolaus</i>	アカハラ	(W)
96. <i>Turdus pallidus</i>	シロハラ	(W)
97. <i>Turdus obscurus</i>	マミチャジナイ	(M)
98. <i>Turdus naumanni</i>	ツグミ	(W)
99. <i>Cettia diphone</i>	ウグイス	(R)
100. <i>Acrocephalus arundinaceus</i>	オオヨシキリ	(M)
101. <i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	コヨシキリ	(M)
102. <i>Phylloscopus borealis</i>	メボソムシクイ	(M)
103. <i>Phylloscopus occipitalis</i>	センダイムシクイ	(M)
104. <i>Regulus regulus</i>	キクイタダキ	(M)
105. <i>Cisticola juncidis</i>	セッカ	(S)
106. <i>Ficedula narcissina</i>	キビタキ	(M)
107. <i>Muscicapa latirostris</i>	コサメビタキ	(M)
108. <i>Terpsiphone atrocaudata</i>	サンコウチョウ	(M)
Aegithalidae	エナガ科	
109. <i>Aegithalos caudatus</i>	エナガ	(M)

表 1. つづき
Table 1. continued

Paridae	シジュウカラ科	
110. <i>Parus varius</i>	ヤマガラ	(M)
111. <i>Parus major</i>	シジュウカラ	(R)
Zosteropidae	メジロ科	
112. <i>Zosterops japonica</i>	メジロ	(R)
Emberizidae	ホオジロ科	
113. <i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ	(R)
114. <i>Emberiza fucata</i>	ホオアカ	(M)
115. <i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ	(W)
116. <i>Emberiza elegans</i>	ミヤマホオジロ	(W)
117. <i>Emberiza spodocephala</i>	アオジ	(W)
118. <i>Emberiza schoeniclus</i>	オオジュリン	(M)
119. <i>Emberiza flaviventris</i>	キンムネホオジロ	(C)
Fringillidae	アトリ科	
120. <i>Fringilla montifringilla</i>	アトリ	(M)
121. <i>Scrinus canaria</i>	カナリア	(C)
122. <i>Carduelis sinica</i>	カワラヒワ	(R)
123. <i>Carduelis spinus</i>	マヒワ	(W)
124. <i>Uragus sibiricus</i>	ベニマシコ	(M)
125. <i>Pyrrhula pyrrhula</i>	ウソ	(M)
126. <i>Eophona migratoria</i>	コイカル	(W)
127. <i>Eophona personata</i>	イカル	(M)
128. <i>Coccothraustes coccothraustes</i>	シメ	(W)
Estrididae	カエデチョウ科	
129. <i>Amandava amandava</i>	ベニスズメ	(C)
Ploceidae	ハタオリドリ科	
130. <i>Vidua macroura</i>	テンニンチョウ	(C)
131. <i>Passer montanus</i>	スズメ	(R)
Sturnidae	ムクドリ科	
132. <i>Sturnus philippensis</i>	コムクドリ	(M)
133. <i>Sturnus cineraceus</i>	ムクドリ	(R)
Corvidae	カラス科	
134. <i>Garrulus glandarius</i>	カケス	(M)
135. <i>Cyanopica cyana</i>	オナガ	(R)
136. <i>Corvus corone</i>	ハシボソガラス	(R)
137. <i>Corvus macrorhynchos</i>	ハシブトガラス	(R)

学名と和名の次に渡りの区別を記載した。留鳥 (R: resident), 夏鳥 (S: summer), 冬鳥 (W: winter), 旅鳥 (M: migrant) に分けた。観察回数が少ない種でも調査地付近で繁殖する種は留鳥とした。また、飼鳥や籠抜けした種は (C: cage birds) として和名の後に記載した。

1989 年は、7 月頃まで池の水が抜かれた状態であり、コチドリやハクセキレイ以外の水鳥はほとんど見られなかった。8 月中旬には、前年と同様に湿地状態の池にイヌビエの大きな群落が形成された。イヌビエの結実後、スズメの幼鳥の群れが飛来して採食するようになり、10 月下旬頃まで個体数が増加した（桑原ら、1991）。ただし、イヌビエの群落の大きさは、1988 年よりも狭かったため、1988 年にみられたようなカワラヒワの群れや、千数百羽のスズメの大群は観察されなかった。9 月以降、降雨により池の水位が増し、カルガモやコサギなどが見られるようになった。10 月には、コガモの群れがイヌビエを採食するよう

になった。11 月中旬にはキンクロハジロやホシハジロなどの潜水性のカモ類、ヒドリガモやコガモなどの水面採食性のカモ類が記録されるようになった。これらのカモ類は、11 月中旬頃から群れとして確認されるようになり、特に夕方から早朝にかけて個体数が多く、百数十羽が見られることもあった。カルガモ、コガモ、ホシハジロの3種類は、イヌビエをよく採食した。しかし、キンクロハジロの採食物は判明せず、ヒドリガモやハシビロガモは池では採食していなかった。11 月に池の整備工事が終了し、降雨によって池に水がたまると、コサギやイソシギなどが飛来し、池岸で小動物を採食しているのが観察された。ただし、

1989年には魚類はほとんど確認されていなかったため、魚食性のカワセミが舟田池を採食場所とすることはなかった。

1989年2月の開館当初、陸鳥は主にst. 2, 3の保存林のみを利用しており、残りの地域は利用されていなかった。この保存林は留鳥の他に旅鳥の秋の渡りの一時的な生息環境となっていた（青木・桑原, 1990）が、数個体が博物館本館およびオリエンテーションハウスに衝突し、落鳥として届けられた。その内訳は、シロハラ2羽、メボソムシクイ1羽と、キビタキ1羽であり、これらは以後毎年拾得されるようになった。1989年に調査地内でシロハラが観察された期間は、10月中旬から11月下旬までであり、1989年以前に比べると長かった。また、ツグミの飛来時期は例年11月上旬であるが、1989年は少し遅れて11月下旬になった。1989～90年の越冬期にはヒワ類の個体数が少なく、1988～89年にかけて越冬期にみられたようなシメの小群は観察されなかった。これらの調査地を通過する旅鳥の個体数は1989年以降毎年変動していた。

一方、台地上の植栽林は開館当初、鳥類によってほとんど利用されていなかった。その原因は前年に植栽工事が終了したばかりで、生息環境が不安定であったためであった。台地上の植栽林では、まず、スズメやカワラヒワなど都市でもみられる種が採食場所として利用するようになり、秋の渡りの時期になるにしたがって徐々に個体数が増加した。秋以降、それまで保存林などにしか出現していなかったジョウビタキやシメなどの森林性の種も、数羽が観察されるようになり、越冬場所として定着するきざしがみられた。

ムクドリはst. 4-5の裸地やst. 8の草地より、千葉県立青葉の森公園の草地で採食する個体が多かった。その群れは、夕刻、ねぐらへ向かう途中に調査地上空を通過した。ハシボソガラスも、上空を通過するだけのことが多く、調査地内での採食はあまり観察されなかった。公園の整備に伴い、ハシボソガラスが減少する一方、ハシブトガラスの個体数が増加し始めた。また、ハシブトガラスとハシボソガラスが空中で攻撃しあったり、群れ同士で威嚇していた。

2-3. 1990年

1990年4月には野鳥観察舎が開館し、1989年よりもさらに観察回数が増した。そのため、1990年は新たに観察された種が最も多かった（青木, 1991）。新たに記録された種は、ヨシガモ、スズガモ、ハイタカ、サシバ、コチョウゲンボウ、ユリカモメ、ウミネコ、アオバト、コシアカツバメ、イワツバメ、サンショウクイ、ノゴマ、ルリビタキ、トラツグミ、キクイタダキ、ミヤマホオジロ、アトリ、ウソ、カケス、オカメインコ、コザクラインコ、カナリア、ベニスズメ、キンムネホオジロ、テンニンチョウ、の25種である。こ

のうち84%が陸鳥で、水鳥は16%でしかなかった。繁殖期にも留鳥の種数は多くなかった。1990年の繁殖期にはカイツブリ、モズ、ホオジロ、キジなどの繁殖が確認されただけであった。

1990年には、湿原(st. 6)の整備工事が終了し、水鳥の生息環境に人が立ち入らなくなり、舟田池の水位が安定した。池の水は、年間を通じて平均1～2mほどの深さに保たれた。そのため水生昆虫や小動物を餌とするコサギ、水面を休息の場とするカモ類、周囲の斜面林で休息するゴイサギなどの水鳥が飛来し、定着するようになった。1990年以降継続して見られるようになったのは、カルガモ、コガモ、マガモなどの水面採食性の種であり、10月からはコガモとカルガモ、11月以降はマガモがそれぞれ定着し、越冬するようになった。しかしながら、12月になって池の縁や湿原で植栽工事が行なわれ、この人為的干涉によってこれらのカモ類の個体数は減少してしまった。

一方、浅い水際にイヌビエなどを採食していたホシハジロの数百羽の群れは観察されなくなった。これは、池に水が満たされたため、餌となっていたイヌビエなどのイネ科の植物が減少したことによる。同様に、1988年以降毎年8～10月にかけて形成されていたスズメの大群は、イネ科植物の群落の縮小とともに観察されなくなった。むしろ、群れはst. 6で観察されることが多く、最大数は10月24日の約1,000羽であった。

また、特筆すべき事項として、4月26日以降、池内にカイツブリが定住し繁殖したことがあげられる。定着してからカイツブリは4～10月にかけて繁殖し、1990年以降営巣が繰り返されるようになった。さらに、1986年以来記録のなかったカワセミが、1990年6月24日に1羽観察された。9月以降は常時1～3羽がみられ、越冬するようになった。

1990年は気象状況の変化にともなって、出現した種もみられた。1990年2月1日に多量の積雪があり、この積雪とともにカシラダカの群れ40～50羽が飛来した（千葉県立中央博物館, 1990b）。以降、本種は越冬するようになった。1989～90年の冬期におけるツグミの個体数は比較的多かったが、他の種の越冬個体数は少なかった。秋の渡りの時期には、池周辺のイヌシデ等の落葉広葉樹林にカワラヒワの群れが飛来した。群れが最も多くみられた時期は、10月下旬～11月中旬であり、最大個体数は11月14日の359羽であった。1989～90年の越冬期には、まだアカハラさえ越冬しておらず、越冬する種や個体数は少なかった。1990年の秋から冬にかけて、保存林の外にも冬鳥の生息に適した疎林などの環境がst. 4, 5に整ってきたため、越冬する種やその越冬個体数が増した。特にジョウビタキとアカハラの個体数の増加が顕著であった。1988～89年、1989～90年のいずれの越冬期

間にも、ジョウビタキが2～3羽、アカハラが1～2羽がみられたにすぎなかったのに比べると、1990年から1991年の冬には、それぞれの種が4～5羽越冬するようになった。特に、アカハラは1989年以前はst. 2, 3でしかみられなかったが、1990年秋より越冬範囲を広げ、st. 4などでも採食する個体が観察されるようになった。

以上のように、大規模な工事は1988～90年にかけて約2年行われたため、二次林の保存林以外の植栽林、池の各環境が、それぞれ短期的に著しい変化を繰り返していた。したがって、陸鳥の鳥相の変化は舟田池と同様に1988年から1990年にかけての期間が最も大きかった。

2-4. 1991～1993年

1991年秋以降は池の浚渫工事が終了し、水辺に人が立ち入らなくなった。1990年から水位の著しい変動がなかったため、水鳥類の種構成も安定した。カイツブリやカモ類などは常時観察されるようになり、出現頻度も増した。しかしながら、造成工事の際に一時的に形成された泥地が減少し、植生が遷移したためシギ・チドリ類などの採食場所は消失した。その結果1990年以降、シギ・チドリ類は稀に観察されるだけになった。また、カイツブリの営巣数も池周辺の環境の変化にともない変動した。1991年は3番いが営巣し、そのうち2番いの巣から雛が孵化し、1992～3年は1番いしか繁殖しなかった。池では小魚が増加したためカワセミやカイツブリなどがモツゴなどを採食するようになった。1991年以降、カワセミは繁殖期にも普通に観察されるようになった。

陸上では植栽工事が終了し、草の疎らな造成地がなくなった。1988年ころから繰り返された生息環境の変化がほとんどなくなったため、鳥類にとっての生息状況の変化も小さくなった。それとともに、ツグミの越冬個体数や繁殖期におけるヒバリの記録個体数が減少した。セッカは調査地ではst. 9などでしか観察されなくなり、越冬期は記録されなくなった。陸鳥の生息環境である二次林、植栽林などの各環境が安定したため、観察される種も限定されるようになった。幼鳥に給餌するシジュウカラが1991年に、エナガの営巣が1992年以降に記録されるようになった。また、1991～92年の越冬期からシロハラが越冬するようになった。1990年以前と比べて、1992年以降は陸鳥の種構成も安定した。

3. 千葉県立中央博物館周辺鳥類目録 1982～1993年

1993年12月までに、博物館周辺で記録されたすべての種の観察年月日、性別、年齢、観察個体数(羽数)を記載した。羽色が確認された個体は、幼羽をJ、成鳥羽をAとして記載した。また、野外識別による成長段階(年齢)の判定は観察者により基準が異なるため、

雛はP、幼羽を有する幼鳥はJ、若鳥はImと観察者の判定を尊重した。したがって本報告では観察者の記録をそのまま羽色の後に引用した。さらに、観察時間や出現状況、観察記録、観察者などを記載し、簡単な注釈を付けた。また、観察した地域が明確にわかる場合はst.のナンバーを記した。観察例が報告されている場合は著者名と公表年を記し、著者ら以外の公表されていない観察記録については観察者をできる限り付記した。

普通種については、記録の一部を省略し記載のみとした種もある。また、観察例数の少ない種の記録は再録した。標本番号(CBMZB)は千葉県立中央博物館に収蔵された標本番号である。

Podicipediformes カイツブリ目

Podicipitidae カイツブリ科

1. *Podiceps ruficollis* カイツブリ

1989年以前は舟田池の水位が高かった。1987年8月以前と、1988年6～9月、1989年5～6月、11～12月にだけにみられた。1990年には、池に水がたまり1990年4月26日以降、池内にカイツブリが観察されるようになった。1990年6月下旬から9月にかけて池の東西にわかれて2番いが営巣し、そのうち1番いは2回繁殖した。8～9月にはヒナや幼鳥を含めて合計10羽になった。9月10～13日には最大12羽が確認された。餌として、1990年は主にアメリカザリガニを捕食しており、ヒナに給餌する行動もよく観察された。

1991年には3番いが形成され営巣産卵し、そのうち2番いの巣から雛が孵化した。7月12～13日には成鳥3番い(6羽)5羽、3羽、2羽の雛がみられた。1991年以降はアメリカザリガニの他にモツゴなどの小魚や水生昆虫を雛に給餌していた(前田・木幡, 1992)。1992年と1993年は営巣場所であるヨシが減少したため、繁殖数は減少した。1992年も2番いが営巣したが、ヨシの減少により1番いしか繁殖は成功せず、1993年も1番いしか繁殖しなかった。本種は秋期にも繁殖した。1993年10月6日には雛1羽が孵化した。

Pelecaniformes ペリカン目

Phalacrocoracidae ウ科

2. *Phalacrocorax carbo* カワウ

東京湾内では留鳥であるが、調査地では稀にみられるだけである。11.III.1991(1羽; 上空通過, 青木ほか, 1991), 21.VII.1992(1羽: 池でウシガエルの幼生を捕食, 原田, 1992)などの記録がある。

Ciconiiformes コウノトリ目

Ardeidae サギ科

3. *Ixobrychus sinensis* ヨシゴイ

極稀。25. VII. 1993 (1羽J: 井尻謹絵), 28. IX. ~ 2. X. 1993 (1羽J) など1993年7~10月に見られただけである。

4. *Nycticorax nycticorax* ゴイサギ

博物館が建設される以前は藪があった。1987年8月を最後に池周辺の藪が消失したため、個体数は減少した。1989年から1990年にかけては、稀に博物館上空を夜間に通過しするだけであった。1991年9月以降はニセアカシアなどで休息する個体がときどき観察されるようになった。周年を通じて観察されるが少ない。池ではウシガエルなどを捕食する(須崎, 1991)。

5. *Butorides striatus* ササゴイ

稀な旅鳥。春と秋の渡りの季節にみられる。7~10月の秋の渡りの時期に記録が多い。12. IX. 1991 (1 Call), 22. X. 1991 (1羽J), 5. V. 1992 (1羽), 4~10. VII. 1992 (A1羽: 村上智紀), 7~15. VIII. 1992 (1羽J), 23. VII. 1993 (1羽), などの例がある(青木ほか, 1991)。

6. *Bubulcus ibis* アマサギ

1例のみ。3. V. 1992 (10羽: 5羽の群れが2回、上空を通過した、大庭照代)。

7. *Egretta alba* ダイサギ

稀に記録される。個体数は少ない。

8. *Egretta intermedia* チュウサギ

千葉県内では夏鳥であるが、調査地では稀に記録されるだけである。15. 17. VI. 1990 (1羽), 28. VIII. 1990 (1羽冬羽), 24. IX. 1990 (1羽), 18. X. 1990 (2羽), 14. 18. VIII. 1992 (1羽冬羽), 5. VIII. 1993 (1羽), 17. VIII. 1993 (1羽), 8. X. 1993 (1羽), などの記録がある。

9. *Egretta garzetta* コサギ

留鳥。周年を通じて、池の端で小動物を採食する姿が観察されるが、個体数は少ない。1991年以降湿地で採食する個体が観察されるようになった。

10. *Ardea cinerea* アオサギ

稀に記録される種。1989年以前には観察されていない。秋・冬にかけ、1羽で上空を通過する例や早朝の観察例が多い。27. X. 1989 (1羽: 上空を通過), 12. X. 1990 (1羽: 田村満), 16. X. 1993, 29. X. 1993, 2. X. 1993, 9. X. 1993 (1羽), 13. X. 1993 (1羽), 23. X. 1993 (1羽), 30. X. 1993 (1羽), 4. X. 1993 (1羽), 15. X. 1993 (1羽), などの記録がある。

Anseriformes ガンカモ目

Anatidae ガンカモ科

11. *Cygnus cygnus* オオハクチョウ

1例のみ。18. X. 1989 (3羽: 上空通過, 越川重治, 桑原・大野, 1990)。

12. *Aix galericulata* オンドリ

稀な旅鳥。10~11月の記録が多い。3. III. 1987 (♀1羽), 30. VIII. 1987 (♀1羽), 7. X. 1989 (8羽: 小倉正一), 30. X. 1991 (♀1羽), 10. X. 1992 (3羽: ♂1羽, ♀2羽), 29. X. 1992 (♂1羽), 30. X. 1992 (♀1羽: 小沼, 1992), 2. X. 1993 (♂エクリプス1羽: 11:40-14:15, 舟田池上空を1回巡回して玄奘方面へ飛び去る, 綾 富美子), 21-28. X. 1993 (♂エクリプス1羽: クヌギの実を、水に潜り採食する, 潜水する場所はst.3付近, 綾 富美子), 29. X. 1993 (3羽: ♂エクリプス, ♂, ♀), などの記録がある。1993年10月にはクヌギやコナラの実を採食していた(綾, 1994)。

13. *Anas platyrhynchos* マガモ

1989年以前は、3. III. 1987に2羽(♂, ♀)など数例の記録しかなかった。1990年以降冬鳥として普通にみられるようになった。20. X. 1990, ~2. IV. 1991, 17. X. 1991, ~3. IV. 1992, 6. X. 1992, ~30. III. 1993, 2. X. 1993, ~10. IV. 1994, などが越冬期間である。

14. *Anas poecilorhyncha* カルガモ

凌瀬以前の舟田池での記録は少なかった。池に水が満たされていた1987年8月以前と、1988年6~9月、1989年5~6月、11~12月に数羽が記録されただけであった。1990年以降は周年を通じて普通にみられるようになった。千葉市内で繁殖するが、調査地内での繁殖記録はない。青葉の森公園では繁殖記録がある。冬期に個体数が多い。

15. *Anas crecca* コガモ

冬鳥として越冬する。普通にみられ、個体数も少ない。st.1, st.6で採食する。24. IX. 1990, ~21. IV. 1991, 18. X. 1991, ~7. V. 1992, 12. IX. 1992, ~18. V. 1993, 17. IX. 1993, ~7. V. 1994, などが1990年以降の越冬期間である。

16. *Anas penelope* ヒドリガモ

稀な冬鳥。いずれも池の水面を休息の場に利用していた。

17. *Anas falcata* ヨシガモ

稀な冬鳥。15~24. X. 1990 (♂1羽: 千葉県立中央博物館, 1991), 17. II. 1991 (♂1羽), 9. X. 1991 (♂1羽) などの記録がある。

18. *Anas strepera* オカヨシガモ

千葉市内の埋め立て地では少数が繁殖しているが、調査地では稀な冬鳥として飛来する。2. II. ~6. III. 1991 (♂1羽), 19. III. 1991 (7羽: ♂3羽♀4羽),

22. X I. 1991 (♀2羽), 30. VIII. 1992 (3羽: ♂エクリプス1羽♀2羽)などの記録がある。

19. *Anas acuta* オナガガモ

冬鳥。個体数は少ない。16. III. 1988 (9羽: 池の泥地で採食していた), 2. X II. 1991 (♀1羽: 死亡, CBMZB-1309) 9. X II. 1991 (♂1羽)などの記録がある。

20. *Anas clypeata* ハシビロガモ

冬鳥。個体数は多くない。29. IX. 1989 (3羽: ♂2羽, ♀1羽, 小原千夏), 1. IX. 1989 (15羽: 小原千夏); 2. X II. 1989 (8羽: 小原千夏)などが1990年以前の記録である。1990年以降の観察例は多い。

21. *Aythya ferina* ホシハジロ

1989年11月中旬〜12月上旬に継続して飛来し、池の水面や水際でイヌビエの種子を採食していた。1989年は特に夕方から早朝にかけて個体数が多く数百羽が観察された。1990年以降は普通に越冬している。

22. *Aythya fuligula* キンクロハジロ

1990年以前の観察個体数は少なく、1989年11月に池内で採食していた記録が残っているくらいであるが、1990年以降は普通に越冬している。2〜3月頃、個体数が増す。

23. *Aythya marila* スズガモ

希な冬鳥。1〜6. X I. 1990 (2羽), 20. X. 1991 (♀1羽) 17〜20. X I. 1991 (1羽)

24. *Bucephala clangula* ホオジロガモ

1例のみ。19. X I. 1991 (♀1羽: 15:30, 15分程, 水面を泳ぎ飛び去る, 青木ほか, 1992)。

25. *Mergus albellus* ミコアイサ

1例のみ。30. X I. 1991 (♀1羽: 1時間程, 水面を泳ぎ飛び去る, 青木ほか, 1992)。

Falconiformes ワシタカ目

Accipitridae ワシタカ科

26. *Milvus migrans* トビ

3例のみ。24. X. 1991 (1羽: 上空通過), 22. X II. 1991 (1羽: 上空通過), 23. III. 1993. (1羽: 上空旋回)などの記録がある。

27. *Accipiter gentilis* オオタカ

1例のみ。15. I. 1992 (1羽 Im.: 10:35, 前田篤史)

28. *Accipiter nisus* ハイタカ

3例のみ。12. X. 1990 (1羽), 25. X I. 1990 (1羽), 9. X I. 1991 (♂1羽)

29. *Accipiter gularis* ツミ

2例のみ。16, 18. VI. 1993 (1羽)

30. *Buteo buteo* ノスリ

1例のみ。3. X II. 1989 (1羽: 上空を通過した, 小倉正一)

31. *Butastur indicus* サシバ

旅鳥。春と秋の渡りの季節に調査地を通過する。9月の観察例が多い。2. X I. 1990 (1羽), 6. X I. 1990 (1羽), 6. V. 1991 (1羽), 1. IX. 1991 (1羽), 9, 13. IX. 1992 (1羽)などの記録がある。

Falconidae ハヤブサ科

32. *Falco peregrinus* ハヤブサ

2例のみ。2. X II. 1992 (1羽 J: 8:15, 保存林に休息していた個体をハシボンガラスとハシブトガラス約30羽がモビングしていた)。18. XI. 1993 (1羽 J: 9:40, 南南西より飛来し湿地などの上空を飛び西へ飛び去る)

33. *Falco subbuteo* チゴハヤブサ

上空を通過した3例のみ。22. X. 1991 (J1羽), 24. X. 1991 (1羽: 14:00頃, 脚に餌をとらえていた), 15. III. 1992 (1羽: 11:54, 北から飛来し池上空でホバリングした後, 南へ飛び去る)。

34. *Falco columbarius* コチョウゲンボウ

1例のみ。24. II. 1990 (1羽: 道路から青葉の森公園の芝生の方へ飛ぶ, 小倉正一)

35. *Falco tinnunculus* チョウゲンボウ

少ない。1990年以前は1989年10月から冬の間, 1羽が継続的にみられてた。1990年以降は断続的に周年を通じて観察されている。

Galliformes キジ目

Phasianidae キジ科

36. *Coturnix coturnix* ウズラ

1例のみ。5. VII 1992 (1羽: 池の縁の草地に隠れていた, 長谷川雅美, 桑原, 1993)。

37. *Bambusicola thoracica* コジュケイ

留鳥。周年を通じて観察される。個体数は少ない。9. VI. 1991 (♀1羽, P6羽), 31. VII. 1992 (A2羽, P2羽), 14. VIII. 1992 (P3羽), 1. VIII. 1993 (♀1羽, P5羽), 17. IX. 1993 (♀A1羽, P7羽), などの記録がある。博物館の窓ガラスに衝突することもある(CBMZB-1188)。

38. *Phasianus colchicus* キジ

留鳥。周年を通じて観察される。個体数は少ない。博物館の窓ガラスに衝突することもある。16. V. 1990 (1巢9卵, 千葉県立中央博物館1990c), 19. VII. 1990 (2羽: ♀A1羽, P1羽), 9. VI. 1991 (5羽: ♀A1羽, P4羽), 11. IX. 1991 (♂1w: CBMZB-1522, 幸島栄), 10. VI. 1993 (7羽: ♀A1羽, ヒナ6羽), などの繁殖記録がある。

Gruiformes ツル目

Rallidae クイナ科

39. *Gallinula chloropus* バン

少ない。舟田池に水が満たされていた1987年8月

以前と1988年9月, 1989年11月にみられている。個体数は少ない。24.X.~3.XII.1991(1羽J), E~L.X.1992, 22.XI.1992(1羽), 2.X.1993(1羽), 16, 17.XII.1993(1羽J), 5.IX.1988(♂J: CBMZB-768, 吉村光敏)などの記録がある。

40. *Fulica atra* オオバン

1例のみ。5.I.1991(1羽: 青木ほか, 1992)

Charadriiformes チドリ目

Charadriidae チドリ科

41. *Charadrius dubius* コチドリ

夏鳥。4~8月にかけて池や博物館周辺で観察された。1989年には公園造成地で数番いが繁殖した。繁殖終了後の6月には池に集まり、個体数が増加した。1990年以降の個体数は少ない。また1990年には生態実験園内(st.10)で1巣が確認されたがその巣卵は放棄された(13.VI.1990, 1巣3卵)。6.IV.1989(1羽), 6.IV.1990(1羽), 26.X.1990(1羽A), 30.III.1991(1羽: ♀), 2.IV.1992(1羽: ♀), 3.IV.1993(1羽: ♀) 16.V.1993(1羽: ♀, 大庭照代)などの記録がある。

42. *Vanellus vanellus* タゲリ

1例のみ。20.II.1993(1羽: 上空を通過した, 軽部嘉夫)。

Scolopacidae シギ科

43. *Calidris alpina* ハマシギ

2例のみ。18.X.1988(冬羽1羽: 池の泥地で観察された), 26.VII.1990(1羽), などの記録がある。

44. *Tringa ochropus* クサシギ

極稀な旅鳥。4.VIII.1988(1羽)以後, 池で観察されるようになった。1989年と1991年には記録されていない。15.VIII.1990(1羽), 17, 20.IX.1992.(1羽), 20.XI.1993(1羽: 14:50. 池の岸辺に止まった, 綾 富美子), などの記録がある。

45. *Tringa brevipes* キアシシギ

旅鳥。春・秋の渡りの時期に飛来する。春より秋の記録が多い。個体数は少ない。17.VIII.1991(1羽, 9:50. 池の岸で採食, 前田篤史), 16.V.1992(1羽), 8.VIII.1992(1羽, 9:15~20. 池の際で水浴びし, その後石の上で整羽し南へ飛び去る), 9.V.1993(1羽), 17.VIII.1993(1羽), 2.IX.1993(1羽: 14:43. 旋回して飛び去る), などの記録がある。

46. *Tringa hypoleucos* イソシギ

少ない。湿地や池の縁で小動物を採食していることがある。

47. *Numenius phaeopus* チュウシャクシギ

極稀な旅鳥。春の渡りの時期にみられる。2.V.1982(1羽: 唐沢, 1984), 3.V.1993(1羽: 南から北の方向へ飛ぶ, 大庭照代), 16.V.1993(1羽: 大庭照

代)などの記録がある。

48. *Scolopax rusticola* ヤマシギ

冬鳥。1991年1~2月に1羽が観察された。27.I.1991(1羽: 16:40頃, 小原千夏), 29.I.1991(1羽: 11:30頃), 23.II.1991(1羽), 22.II.1992(2羽: 16:47, st.5 せせらぎから飛び立つ, 前田篤史), 23.II.1992(1羽, 湿地 st.6, 大庭照代), などの記録がある。

49. *Gallinago gallinago* タシギ

千葉県内では冬鳥であるが, 調査地では極稀な旅鳥。9.IX~8.X.1992に(1~6羽)が見られた。16.I.1992(1羽: 小倉正一), 9.IX.1992.(1羽: 舟田池で休息), 17.IX.1992.(7羽), 16.IX.1992(2羽), 8.X.1992.(2羽), などの記録がある。

Phalaropodidae ヒレアシシギ科

50. *Phalaropus lobatus* アカエリヒレアシシギ

1例のみ。22.IV.1992(♀A1羽: 13:24, 池に飛来し20秒程水面に浮いた後北東へ飛び去った, 前田・木幡, 1992)。

Laridae カモメ科

51. *Larus ridibundus* ユリカモメ

千葉県内では冬鳥であるが, 調査では極稀に上空を通過する。30.V.1990(1羽), などの記録がある。

52. *Larus argentatus* セグロカモメ

千葉県内では冬鳥であるが, 調査では極稀に上空を通過する。1983~1989年の記録はなく, 3.V.1982(5羽: 上空通過, 唐沢, 1984), 30.X.1991(1羽), 4.II.1992(1羽), 1.IV.1993(1羽: 9:30, 上空通過), 5.IV.1992(50羽: 前田・木幡, 1992), 30.VII.1991.(5羽: 9:15 上空通過)などの記録がある。

53. *Larus canus* カモメ

1例のみ。30.X.1991, 10時頃に1羽がセグロカモメ10羽とともに上空を通過した記録がある(青木ほか, 1992)。

54. *Larus crassirostris* ウミネコ

稀に上空を通過する。25.VIII.1990(3羽), 7.V.1993(30羽)などの記録がある。

55. *Sterna hirundo* アジサシ

1例のみ。4.X.1992(冬羽1羽: 池に飛来し上空を数回旋回した後, 北西方向へ飛び去った, 須田, 1993)。

56. *Sterna albifrons* コアジサシ

夏鳥として4~9月に飛来する。池に水が満たされていた1987年8月以前には, 5~8月にかけて池で採食する数個体がみられた。その後, 池に水がなかった時期から魚類が生息していなかった1991年頃までの記録は少ない。調査地付近では中央区新浜周辺に繁殖コロニーがある(中安, 1988)。調査地では夏羽成

鳥しか観察されておらず、幼鳥や冬羽の個体はまだ記録されていない。12. IX. 1991 (1羽), 21. VI. 1992 (4羽: 13:13, 軽部嘉夫), 26. IV. 1992. (2羽: 右脚にリングがついている個体に求愛給餌), 29. IV. 1992 (3羽: 右脚にリングがついている♀が1羽。この個体は5月8日まで観察された), 17. V. 1992 (2羽: 求愛給餌), 22. V. 1992 (4羽), 21. VI. 1992 (4羽, 13:13), 3. VII. 1992 (2羽), 7. V. 1993 (2羽: 求愛給餌, 右脚にリングがついている♀が1羽), 8. V. 1993 (2羽: 池に3回飛来し, 求愛給餌をする, 井尻謹絵, 大塚直樹), 18. V. 1993 (1羽: 池に数回飛来する。魚を捕らえるとすぐ西へ飛び去る)

Columbiformes ハト目

Columbidae ハト科

57. *Columba livia* ドバト (カワラバト)

飼鳥。周年を通じて普通に見られる。博物館が建設される以前に畜産試験場跡地, 建造物内で群れがみられた。現在は上空を通過することが多い。キジバトよりも記録は少ない。

58. *Streptopelia decaocto* シラコバト

2例のみ。11. VII. 1991 (3羽: エノキで休息していた, 青木ほか, 1992), 21. VIII. 1992 (1羽: ニセアカシアの横木に少し止まり飛去した)。

59. *Streptopelia orientalis* キジバト

留鳥。周年を通じて普通にみられる。衝突して死亡する個体もいる (26. I. 1990, CBMZB-1172.)

60. *Sphenurus sieboldii* アオバト

1例のみ。15. XI. 1990 (♂1羽: 5分ほど木の上で実を食べていた)

Psittaciformes オウム目

Cacatuidae オウム科

61. *Calyptorhynchus magnificus* アカオクロオウム

飼鳥。1例のみ。14. VII. 1991 (1羽: 前田篤史)

62. *Nymphicus hollandicus* オカメインコ

飼鳥。1例のみ。24. II. 1990 (1羽: シロオカメインコ, 小倉正一)。

Psittacidae インコ科

63. *Melopsittacus undulatus* セキセイインコ

飼鳥。籠抜け鳥が野性化した種。スズメの群れの中で観察されることがある。また, 単独で見られることがあるが, その記録は秋期に多く厳冬期にはみられない (鶴見・桑原, 1991)。

64. *Agapornis roseicollis* コザクラインコ

飼鳥。1例のみ。28. IV. 1990 (1羽)

65. *Psittacula krameri* ワカケホンセイインコ (ホンセイインコ)

飼鳥。籠抜け鳥が野性化した種。1987年までは数十羽の群れが調査地にねぐらをとっていた。1988年以降, 上空通過する個体が稀に観察されるだけになった。

Cuculiformes ホトトギス目

Cuculidae ホトトギス科

66. *Cuculus saturatus* ツツドリ

9~10月に旅鳥として飛来する。6. X. 1989 (1羽: 小倉正一), 7. X. 1990 (1羽), 16. IX. 1991 (1羽), 2. 4. X. 1991 (1羽), 19. IX. 1993 (1羽), 21~24. IX. 1993 (1~2羽), 30. IX. 1993, 7. 13, 14. X. 1993 (1羽) などの記録がある。

67. *Cuculus poliocephalus* ホトトギス

千葉県内では夏鳥であるが調査地では稀な旅鳥として飛来する。ツツドリの観察記録より記録は少ない。9. IX. 1988 (2羽: 桐原ほか, 1989), 26. IX. 1990 (1羽), 2. 4. VI. 1992 (1羽), などの記録がある。

Strigiformes フクロウ目

Strigidae フクロウ科

68. *Ninox scutulata* アオバズク

夏鳥。繁殖記録はないが, 夜間鳴き声が聞かれる。1989年には街燈に集まる昆虫を採食する個体1羽が観察された (村山, 1990)。1993年10月27日にも1羽がみられている。22. I X. 1989 (1羽: 19:00~19:11, 電灯に飛来する昆虫を捕食), 7. V. 1990 (1羽: 林 浩二) などの記録がある。

69. *Strix uralensis* フクロウ

稀。18. III. 1991 (1羽: 林 浩二), 10. IV. 1991 (1羽), 16. IV. 1991 (1羽), 19. I. 1992 (1羽: 17:21に観察された, 平間雅雄), 4. II. 1992 (1羽: 夜間に観察された, 大野啓一), 17. IX. 1992 (1羽), などの記録がある。

Apodiformes アマツバメ目

Apodidae アマツバメ科

70. *Apus pacificus* アマツバメ

旅鳥。上空を秋と春渡りの際通過する。1992年と1993年には見られていない。3. X. 1991 (1羽), 4. X. 1991 (5羽), 6. X. 1991 (3羽), 25. X. 1991 (3羽), 31. X. 1991 (1羽), など秋期の渡りの季節の記録が多い。

Coraciiformes ブッポウソウ目

Alcedinidae カワセミ科

71. *Alcedo atthis* カワセミ

1982年から1986年にかけて, 稀に1羽が記録された。1986~89年の間はほとんど観察されなかった。1990年に池に水をためるようになってからも1990

年6月24日に1羽が記録されただけであった。1990年9月以降は1～3羽が生息するようになった。1990～91年の冬期に越冬個体が観察されるようになり、周年を通じて観察されるようになった。ただし、1990年以前は舟田池内での採食はあまり観察されていない。1991年にはモグを捕食しているところが観察されている。1993年5月下旬には、カワセミの巣穴が2個、青葉の森公園予定地で確認された。1993年の6月には、巣立ち直後の幼鳥が見られた。6月8日には成鳥2羽、幼鳥7羽、6月10日には成鳥♂、♀、幼鳥4羽計6個体が、6月11日には成鳥♂、♀、幼鳥3羽計5個体が、それぞれ観察された。博物館などに衝突する個体もいる (25.IX.1993, 1W: CBMZB-1763, 小田島高之, CBMZB-1598, 由良 浩など)。

Piciformes キツツキ目

Picidae キツツキ科

72. *Jynx torquilla* アリスイ

10. X I. 1992 (1羽: イヌシデから湿地のハンノキ林へ飛ぶ個体が観察された), 25. X I. 1992 (10:50, 池の岸の枯れ草に止まるがハクセキレイ2羽に追われ、ヨシに飛び込む), 3. X II. 1992 (16:20, ハンノキの枝に止まる), 10. X II. 1992 (1羽: 公園の芝生でみられた), 16. X II. 1992 (1羽: 14:00, 整羽した後採食), 22. X II. 1992 (1羽: 8:15, ハンノキ林の林床より飛び立つ), などの記録がある。

73. *Dendrocopos kizuki* コゲラ

留鳥。周年を通じて、2～3羽がみられる。シジュウカラと同時に観察されることも多い。調査地での繁殖記録はまだない。

Passeriformes スズメ目

Alaudidae ヒバリ科

74. *Alauda arvensis* ヒバリ

留鳥。博物館敷地内に少なく、周辺の草地などに多く生息する。1989年には、生態園で1巣、生態園前の草地で1巣確認されたが、孵化には至らなかった。1991～93年には、博物館前の草地に5～6羽が確認された。

Hirundinidae ツバメ科

75. *Hirundo rustica* ツバメ

夏鳥。例年4～8月にかけて、池の上空で普通にみられる。初認は3月中、下旬である。繁殖終了後、博物館本館や博物館前の電線に数十羽が休息することがある。11～12月にかけて、池の上空で稀にみられることもある。15. III. 1989 (1羽: 桑原, 1990b), 15. III. 1990 (3羽: 11:00, 13:15, 13:25 に各1羽), 16. III. 1990 (8羽), 25. III. 1990 (1羽: 8:30, 10:30 に飛来), 13. III. 1991 (1羽: 原田・小倉, 1991), 3. VIII.

1991 (250羽), 25. III. 1992 (2羽), 27. III. 1993 (1羽) などの記録がある。

76. *Hirundo daurica* コシアカツバメ

千葉県内では夏鳥であるが、調査地では6～8月にかけて、池の上空で稀にみられる。3. VI. 1990 (2羽), 1. VII. 1992 (1羽), 4. VII. 1992 (1羽: 村上智紀), 13. VIII. 1993 (3羽: 14:31～32, 池の水面へ数回下降した), などの記録がある。

77. *Delichon urbica* イワツバメ

千葉県内では夏鳥であるが、調査地では4～10月にかけて、池の上空でみられる。16. X. 1990 (1羽), 19. IV. 1991 (原田・小倉 1991), 6. VIII. 1991 (2羽), 23. IX. 1991 (3羽), 14. IV. 1992 (2羽) ～13. IX. 1992 (1羽), などの記録がある。

Motacillidae セキレイ科

78. *Motacilla cinerea* キセキレイ

千葉県内では留鳥であるが、調査地では稀に現れる種である。6. IV. 1989 (1羽), 19. VIII. 1989 (1羽), 23. VII. 1991 (2羽), 15. VIII. 1991 (1羽), 27. VIII. 1991 (♀A), 11. X I. 1992, 12. X. 1992, 5. X I. 1992 (2羽), 10. X II. 1992, 22. VII. 1993 (1羽), 5. VIII. 1993 (1羽), 26～29. IX. 1993, などの記録がある。

79. *Motacilla alba* ハクセキレイ

留鳥。池周辺、公園造成地、道路などで普通にみられる。1989年6月～7月にかけて、本館のホール前で餌を運ぶ成鳥(♂-♀)の姿を確認した。28. IV. 1989 (2羽: ♂A および ♀A の2羽で交互に餌を運ぶ, 正確な営巣場所は確認されなかった)。ホオジロハクセキレイ *M. alba leucopsis* も記録されている (28. III. 1990: ♂A, 池にいる5羽のハクセキレイのうち1羽, 冬羽から夏羽に換羽中, 福田佳弘)。

80. *Motacilla grandis* セグロセキレイ

千葉県内では留鳥であるが、調査地では稀に現れる種である。29. X I. 1987 (1羽), 10. VI～17. IX. 1992 (1羽), 24. X II. 1992 (1羽), 26. X. 1993 (1羽), 17. VIII. 1993 (1羽), などの記録がある。

81. *Anthus hodgsoni* ビンズイ

冬鳥。個体数は少ない。調査地では1989年以前は通過するだけであったが、1990～1991年の冬から数羽が越冬するようになった。1991年以降は冬期普通にみられるようになった。21. X. 1990～7. III. 1991, 30. X. 1991～12. II. 1992, 10. X I. 1992～2. III. 1993の期間越冬した。

82. *Anthus spinoletta* タヒバリ

千葉県内では冬鳥であるが、調査地での越冬記録はない。池が干上がった際の記録が多い。1990年以降は池の上空通過したり、博物館周辺の造成地で時々みられるだけである。

Campephagidae サンショウクイ科

83. *Pericrocotus divaricatus* サンショウクイ

1例のみ、22.V.1990(1羽: さえずりながら上空を通過した)

Pycnonotidae ヒヨドリ科

84. *Hypsipetes amaurotis* ヒヨドリ

留鳥および冬鳥。周年を通じて普通にみられるが、春と秋の渡りの時期に一時的に個体数が増すことがある。夏期よりも冬期に個体数が多い。20.X.1990(100羽)、21.IV.1991(350羽: 50羽と300羽の群れが通過した、大庭照代)、12.X.1991(80羽: 10:00頃、31羽、19羽、30羽の群れが飛び去る、前田篤史) 10.IV.1992(106羽: 上空通過)、16.X.1990(63羽)、など春と秋の渡りの時期にも個体数が多い。冬期には、食用の野菜類なども採食する(矢野、1992)。

Laniidae モズ科

85. *Lanius bucephalus* モズ

留鳥。周年を通じて普通にみられる。夏期の5~7月に出現頻度が少なくなる。秋期~冬期にかけて、2~3羽の♂が調査地内で高鳴きをする。

Bombycillidae レンジャク科

86. *Bombycilla garrulus* キレンジャク

極稀。1993年の春の渡りの季節の記録が多い。18.III.1993(10羽: クスギの林へ飛ぶ、阿部代始子)、25.III.1993(1羽)などの記録がある。

87. *Bombycilla japonica* ヒレンジャク

極稀。春の渡りの季節の3~5月にみられる。1991年と1993年の記録が多い。3.V.1991(35羽: 10時30分に20羽、16時20分に15羽が調査地を通過した)、キツタの実を採食する行動が記録されている(桑原、1991)、26.III.1991(15羽)、6.IV.1991(4羽)などの記録がある。

Troglodytidae ミソサザイ科

88. *Troglodytes troglodytes* ミソサザイ

1例のみ。10.X.II.1993(1羽: 9:30頃、園路でみられた後、湿地のブッシュへと移動した)。

Muscicapidae ヒタキ科

89. *Erithacus calliope* ノゴマ

1例のみ。24.X.1990(♀J: オリエンテーションハウスの窓に衝突した、CBMZB-1360、池田安徳)。

90. *Tarsiger cyanurus* ルリビタキ

2例のみ。8.X.II.1990(1羽)、14.II.1991(1羽)。

91. *Saxicola torquata* ノビタキ

1例のみ。4.X.1992(冬羽1羽: 12:30頃、湿原のセイタカアワダチソウにとまる、箕輪義隆)。

92. *Phoenicurus aureoreus* ジョウビタキ

冬鳥。例年10月初旬頃飛来し、翌年3月まで普通にみられる。春と秋の渡りの時期には5~6羽が通過するが、調査地で越冬する個体は2~3羽と少ない(箕輪、1991)、28.X.1990(♀: CBMZB-1361)、26.X.1990(♂: CBMZB-1564)などが衝突し、死亡した。

93. *Turdus dauma* トラツグミ

稀にみられる。個体数は極めて少なく、調査地では1羽しか見られていない。14.X.I.1990(1羽)、17.X.1991(1羽)、23.I.~17.IV.1993(1羽: 越冬)、などの記録がある。

94. *Turdus cardis* クロツグミ

極稀。1例のみ。7.VI.1988(1羽: さえずり)。

95. *Turdus chrysolaus* アカハラ

冬鳥。例年11月初旬頃飛来し、翌年5月までみられる(木幡、1993)。秋の渡りの時期に一時的に個体数が多くなることがある。

96. *Turdus pallidus* シロハラ

千葉県内では冬鳥。1989年以前、調査地では11月上旬の秋の渡りの時期、4月中旬~5月上旬の春の渡りの時期に通過する旅鳥であった。1990年以降、越冬する個体がみられるようになり、厳冬期でも観察されるようになった。博物館やオリエンテーションハウスの窓に衝突することもある(CBMZB-801、1111、1112など)。

97. *Turdus obscurus* マミチャジナイ

9月から11月にみられる旅鳥。1990年以前はシロハラの群れに混じって記録された1例(22.X.1989.1羽)、だけであった。1991年9月26日~11月4日の秋の渡りの観察例が多い。26.IX.1991(1羽)、16.X.1991(11羽)、4.X.I.1991(1羽)、11.X.1992(1羽)、などの記録がある。

98. *Turdus naumanni* ツグミ

冬鳥。例年11月上旬頃飛来する。越冬し翌年4月まで普通にみられる。11月下旬頃、一時的に個体数が増加し、20羽前後の群れが見られることがある。秋と春の渡りの時期に見られる個体数は、年によって異なる。1991年の秋に個体数が多く、1991年11月10日に30羽、17日には約300羽21日には80羽が観察された。越冬個体は減少している。15.X.I.1990(155羽)、4.IV.1992(15:00、ぐずる)、17.X.I.1992(36羽)、18.X.II.1993(20羽)などの記録がある。

99. *Cettia diphone* ウグイス

留鳥。周年を通して記録されるが、繁殖期後の9~10月にかけて、観察記録が少ない。

100. *Acrocephalus arundinaceus* オオヨシキリ

県内では夏鳥であるが、調査地では旅鳥である。春

と秋の渡り季節にかけて見られるだけである。ほぼ、例年みられるが1989年には記録されていない。

101. *Acrocephalus bistrigiceps* コヨシキリ

1例のみ、10.VI.1992(♂A1羽: ススキ草原でさえずる)。

102. *Phylloscopus borealis* メボソムシクイ

旅鳥として秋の渡りの時期に通過する。個体数は少ないが、博物館本館のガラス窓に衝突し、死亡することがある。1.X.1989(1羽: CBMZB-1058, 荻野康則), 30.X.1990(CBMZB-1354), 25.VIII.1991(CBMZB-1639), などの記録がある。

103. *Phylloscopus occipitalis* センダイムシクイ

稀な旅鳥。春と秋の渡りの時期にみられる。12.V.1992(♂A1羽: 6:30~8:10, st.2でさえずる, 大庭照代), 12.VII.1992(1羽: シジウカラ4羽, コゲラと共に行動している), 30.VIII.1992(1羽), などの記録がある。

104. *Regulus regulus* キクイタダキ

1例のみ。稀な冬鳥。27.XII.1990(2羽: 青木, 1991)

105. *Cisticola juncidis* セッカ

1986年以前は、畜産試験場跡地の草地で多数生息していたが、生態園の整地に伴い減少した。1987~1989年の間は、9.III.1989(1羽)の記録が1例のみであったが、1990年以降次第に博物館周辺の道路の脇の草地で少数が観察されるようになった。冬期の観察記録は少ない。

106. *Ficedula narcissina* キビタキ

旅鳥。9~10月の秋の渡りの時期に通過する。春の渡りの時期の記録は1例のみ。個体数は少ないが、博物館本館のガラス窓に衝突し、死亡することがある。6.X.1991(1羽), 16~18.X.1991(1羽), 5.V.1992(♂A1羽), 6.X.1992(1羽), 17,18.X.1992(1羽), 4.V.1993(♂A1羽: さえずる), 27.X.1993(1羽), 29.IX.1989(1羽: CBMZB-1056), などの記録がある。

107. *Muscicapa latirostris* コサメビタキ

旅鳥。15.X.1991(1羽: 15:30), 16.X.1991(1羽, 11:40), 2.X.1992(1羽, 14:30頃ホオノキに止まり採食していた), 19.IX.1992(1羽), 10.X.1992(2羽), などの記録がある。

108. *Terpsiphone atrocaudata* サンコウチョウ

2例のみ。3.X.1989(1羽: st.3), と10.X.1990(1羽: st.3)に博物館横の斜面林で観察された。

Aegithalidae エナガ科

109. *Aegithalos caudatus* エナガ

1989年以前は稀に現れる種であったが、1990年以降は冬期にみられるようになった。1992年と1993年には営巣した。3.II.1990(10羽), 16.II.~7.IV.

1992.(st.5にて営巣), 25.II.~6.III.1993(st.4にて営巣), 25.III~31.V.1993(st.4にて営巣するが放棄する), 10.X.1993(16羽; シジウカラ2羽との混群), などの記録がある。

Paridae シジウカラ科

110. *Parus varius* ヤマガラ

1例のみ。8.XII.1989(1羽: 松村 勉, 青木・桑原, 1991)

111. *Parus major* シジウカラ

留鳥。周年を通じて普通に観察されるが、個体数は少ない。繁殖記録はないが、巣立ち雛に給仕している番いが1991年から観察されている。

Zosteropidae メジロ科

112. *Zosterops japonica* メジロ

留鳥。周年を通じて時々観察される。繁殖記録はない。個体数は冬期に増加する。

Emberizidae ホオジロ科

113. *Emberiza cioides* ホオジロ

留鳥および冬鳥。春~夏にかけて個体数は少なく、冬期に個体数が増す。また、調査地内に生息した最多個体数は、10羽(16.I.1989)である。25.I.1992.(1羽, 16:00頃くぜる)などの記録がある。

114. *Emberiza fucata* ホオアカ

極稀。1例のみ。2.V.1982(1羽: 唐沢, 1984)。

115. *Emberiza rustica* カシラダカ

県内では冬鳥であるが、当地では春と秋の移動期に通過する旅鳥である。1989年以前は個体数も記録も少なかったが、1991年2月1日に50羽が記録されてから越冬する個体がみられるようになった(千葉県立中央博物館, 1990b)。1991年10月29日~1992年3月12日に最大10羽, 1992年11月15日~12月12日に最大2羽が記録されている。

116. *Emberiza elegans* ミヤマホオジロ

1990~91年および1991~92年の冬期に数羽が越冬した。3.XII.1991~27.III.1992(♂2羽)

117. *Emberiza spodocephala* アオジ

冬鳥。例年、11月上旬から翌年5月上旬にかけて越冬する。道路わきや住宅予定地の草地や、斜面林林縁のブッシュに生息する。越冬個体は少なく、2~4月の春の渡りの頃に一時的に個体数が増加することがある。

118. *Emberiza schoeniclus* オオジュリン

千葉県内では冬鳥であるが、当地では稀である。2.V.1989(1羽: 桐原ら, 1989), 14.XI.1991(1羽), などの記録がある。

119. *Emberiza flaviventris* キンムネホオジロ

飼鳥。1990年11~12月に記録された。14.X.I.

1990, 17. X I. 1990, 1. X II. 1990, 6. X II. 1990 (♂1羽), などの記録がある。

Fringillidae アトリ科

120. *Fringilla montifringilla* アトリ

1例のみ。24. X I. 1990 (2羽: 約15羽のカワラヒワの群れの中で記録された, 池の水際の木に止まる, 前田篤史)。

121. *Scrinus canaria* カナリア

飼鳥。22. VII. 1990 (1羽: スズメの群れの中で見られ, 水浴びをしていた) の1例のみ。

122. *Carduelis sinica* カワラヒワ

留鳥。周年を通じて普通にみられ, 個体数も多い。繁殖期が終わる7月中旬頃から個体数が増加し, 数十羽の群れがみられる(桑原, 1990)。また, 旅鳥や冬鳥として飛来する個体も多く, その個体数は年により変動する。特に, 1990年には, 舟田池周辺のイヌシデ等の落葉広葉樹林に多数のカワラヒワが飛来した。この秋の渡りの群れは, 10月下旬~11月中旬にみられ, 個体数が多い記録としては, 1990年10月26日の850羽(小倉, 1991では454羽としている), 1991年11月14日の359羽, 1992年10月8日の約500羽, 1993年10月6日の約500羽, などである。繁殖期の個体数は多くない。衝突し死亡する個体もいる(CBMZB-1318, 1331, 1357, 1358)。

123. *Carduelis spinus* マヒワ

稀な冬鳥。1991年と1993年の記録が多い。1993年2月24日から3月19日の期間にみられた最大数は35羽であった。9. X I. 1991. (1羽: 青木・桑原, 1992), 26. III. 1993 (1羽), 8. IV. 1993 (2羽), などの記録がある。

124. *Uragus sibiricus* ベニマシコ

2例のみ。10. X I. 1991 (♂1W. 1羽: 湿地 st. 6 のオオマツヨイグサに止まる)。17. III. 1993 (♀1羽: 8:30~40, st5-6 で記録された, ハンノキや枯れ草に止まり塀を越え, st. 10 へ移動した)。

125. *Pyrrhula pyrrhula* ウソ

房総丘陵では冬鳥だが, 調査地では稀に見られるにすぎない。10. V. 1990 (1羽: 鳴きながら飛び去る), 14. XI. 1991 (2羽: ♂1羽および♀1羽), 5. X II. 1991. (♀1羽), 12. III. 1992 (1羽), などの記録がある。

126. *Eophona migratoria* コイカル

極めて稀。11~4月にかけて観察されている(桑原, 1990a)。7. II. 1991 (1羽), 17. X I. 1992 (1羽) などの記録がある。

127. *Eophona personata* イカル

千葉県内では冬鳥であるが, 調査地では稀に観察されるだけである。11. X I. 1989 (1羽), 14. IV. 1990 (1羽), 24-25. X. 1991 (1羽), 30. X. 1991. (♂1羽

および♀1羽) などの記録がある。

128. *Coccothraustes coccothraustes* シメ

冬鳥。普通にみられる。例年10月下旬に飛来し, 翌年5月上旬頃まで越冬する。秋の渡りの時期に一時的に個体数は増すが, 年によって個体数が少ない時がある。1986年12月, 1988年11月には, 20羽以上の小群が観察されている。9. X I. 1990 (6羽), 18. X I. 1990 (34羽), 14. X I. 1991 (25羽), 9. X II. 1993 (13羽), 9. X II. 1990 (♀: CBMZB-1319) などの記録がある。

Estrildidae カエデチョウ科

129. *Amandava amandava* ベニスズメ

飼鳥。17. VIII. 1990 (1羽) の1例のみ。

Ploceidae ハタオリドリ科

130. *Vidua macroura* テンニンチョウ

飼鳥。13. X II. 1990 (♂1羽: 9:00), 27. X II. 1990 (♂1羽: 松本 勉) の2例のみ。

131. *Passer montanus* スズメ

留鳥。最も個体数が多い種である。1988, 1989年の夏~秋にかけて, 湿地化した池にイヌビエを主とした群落が一時的に形成され, 数百~数千の群れが採食していた(唐沢, 1989)。1990年以降舟田池に水が満たされ, スズメの餌となるイヌビエなどのイネ科の植物が減少し, スズメの個体数は減少した(桑原ら, 1991)。

1990年以降は池よりも st. 6 で群れが観察されることが多く, 観察最大数は1990年10月24日の約1000羽であった。1990年は例年にない暖冬と台風の遅れによって, 12月下旬まで群れが観察されていた。

また, 1988年には本館の壁の排水孔に営巣した番いが観察され, それ以降は毎年数番の繁殖が確認された。1989年6月29日には本館の排水孔の中から雛の声がし, その巣に成鳥が餌を運んでいる行動が観察された。本館などに衝突し死亡する個体もいた(CBMZB-1055, 長谷川浩士)。

Sturnidae ムクドリ科

132. *Sturnus philippensis* コムクドリ

唐沢, 1984 で記載された2例のみ。5. V. 1982 (5羽), 12. VIII. 1983 (6羽)。

133. *Sturnus cineraceus* ムクドリ

1987年以前の個体数は少なかった。しかし, 博物館の敷地の造成前に埋蔵文化財調査を行っている時期および造成中の1987~88年以前の個体数は多かった。1989年博物館の開館以後, 敷地内で日中みかけることが少なくなった。1989~90年にかけては夕刻, ねぐらへ向かう群れが上空を通過したり, 道路沿いの電線に止まる群れが観察されるだけであった。1991

年以降も生態園内での個体数は少なく、博物館本館周辺の草地や緑地、青葉の森公園内に多い。

Corvidae カラス科

134. *Cyanopica cyana* オナガ

留鳥。周年を通じて、時々群れがみられる。個体数は多くない。2. X. 1991 (14 羽: 池上空を通過する) などの記録がある。

135. *Garrulus glandarius* カケス

秋の渡りの時期に稀にみられる。9～11 月にかけて観察記録が多い。28. IX. 1990 (2 羽), 8. X I. 1990 (1 羽), 19. X. 1991 (1 羽: 池上空を通過する), 6. X. 1993 (2 羽), 15. X. 1993 (1 羽: 9: 18), 4. X. 1992 (2 羽: 9: 30), 18. X. 1992 (1 羽: 8: 50) などの記録がある。

136. *Corvus corone* ハシボソガラス

留鳥。個体数は少なく、周年を通じて 2～3 羽が観察される。時々ハシボトガラスと空中で争うことがある。1992 年ころから調査地での観察記録は上空通過の記録だけになり、ハシボトガラスより少なくなった。

137. *Corvus macrorhynchos* ハシボトガラス

留鳥。博物館が開館される前の 1986 年以前の観察例はない。1988 年以降、次第に記録が増えている。現在は上空を数羽で通過する記録が多いが、公園内の整備に伴い個体数はやや増加している。1990 年には青葉の森公園で繁殖した。

考 察

1. 千葉市内の鳥相

本調査では、千葉県立中央博物館周辺で 137 種の鳥類が記録された。千葉市内の内陸で生活する鳥類の生息状況に関する調査は、1918 年から 1944 年にかけて、斎藤源三郎が鳥（日本鳥学会機関誌）に報告して以来、近年ほとんど行われていないので、1982～1993 年の記録をまとめた本報告は、この期間内の千葉市内の雑木林、水田や人里などの内陸の環境で観察される普通種の生息状況と比較する上でよい資料を提供するものと言えよう。

千葉市に生息する鳥類に関して多くの文献がある（桑原、1993）にもかかわらず、信頼に足る報告が公表されることはこれまでほとんどなかった。近年、野鳥観察や探鳥が盛んに行われて、その活動記録をとりまとめた同好会誌が数多く発行されている。会報には観察種の記録が掲載されており、その数は極めて多い。特に珍鳥と呼ばれる出現頻度の低い種の観察例は、いろいろの自然愛好会や愛鳥会といった同好会の会報などで報告されている。観察記録には、地域別に種、個体数、性別、年令などの他、行動などが記載されているが、地名や種の同定、性別、齢の判定などが

編集者によって主観的に行われる傾向が強く、細かな部分でのまちがいや記載漏れなどが多い。したがって、地域の鳥相をまとめるにあたって、記載をそのまま引用することはかえって信頼性を失わせる原因ともなっている。

千葉市内での観察記録を公表しリストにした報告は少ない。調査地付近では、西千葉や千城台野鳥観察園などでも記録がまとめられリストが作製されている（和仁、1992; 鈴木、1989）。しかし、これらの報告においても観察回数は少なく、鳥種の記録数は少ないと言える。我々の調査とほぼ同じ期間に千葉市内の都市公園から記録されたが、博物館周辺では記録されなかった種としては、ハシボソミズナギドリ、オーストンウミツバメ、ヒクイナ、ケリ、タカブシギ、セグロアジサシ、カッコウ、コミミズク、ヨタカ、アカゲラ、ヤブサメ、オオルリ、ヒガラ、クロジ、ハッカチョウ、トラフズクがあげられる（小倉、1994; 小倉ら、1991; 桑原・和仁ら、1994）。以上の 16 種を欠くものの、博物館周辺で記録された鳥類の種構成は、千葉市内の鳥相をよく表していると考えられる。また、調査地での鳥相は、陸鳥と水鳥に分けられるので以下で論じる。

2. 首都圏近郊の鳥相（陸鳥）

博物館周辺における鳥類の生息状況は、桑原・大野（1990）で述べられており、その報告をもとに、普通に観察される種に簡単なコメントをつけ加えた桑原・大野（1991）では、調査地の鳥を留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥などに分けている。これらの報告の中でも夏鳥はツバメやコアジサシ、コチドリなど少数の種であり、冬鳥の種数が多いことが特徴とされている。本報告でも同様の結果が示されており、国内では夏鳥であるキビタキやメボソムシクイなどが旅鳥として調査地を稀に通過するだけであった。このことは千葉市における鳥相、特に夏鳥として繁殖する種類が貧相であることを示唆している。鳥相が貧弱であっても、調査地を通過する旅鳥の種数は多かった。ただし、陸鳥の確認種のほとんどが st. 2, 3 の保存林で記録された。これは、千葉市内では住宅や公園が多く、旅鳥が房総を通過する際には調査地を通過せざるを得ないからとも考えられる。

これらの旅鳥は渡りの途中で博物館の建物に衝突して保護された。死亡した個体は標本として保存された。千葉県内で採集や拾得された標本は、千葉県立中央博物館だけではなく山階鳥類研究所、我孫子市鳥の博物館や島根県立三瓶自然館などに収蔵されている。島根県立三瓶自然館では伊達コレクションとして管理されている標本の中に千葉産の標本が多く含まれている（島根県立博物館、1978）。しかし、千葉県の標本として取りまとめられてはいない。これらの標本のなかには現在、千葉市内では稀になった種も数多く含まれ

ている。以前はよくみられた旅鳥なども、現在では稀な種になっている可能性がある。過去の鳥相を比較するには、千葉市産標本目録などを編集し総括した後に考察すべきであろう。すなわち、過去の鳥類の生息状況を調べる上で標本調査は大変重要であると考えられる。

また、調査地での鳥相の特徴として飼鳥が多く含まれることがあげられる。記録された 137 種の 12 種 (8.8%) が飼鳥であった。飼鳥の占める割合が高いことは、都市近郊の鳥相の大きな特徴とも言えよう。しかし、飼鳥の占める割合を正確に算出した報告は少ないので、現段階で正確な比較を行なうことは難しい。野外でもともと個体数の少ない飼鳥の観察記録を集め、これらの考察を確かめるためには、調査回数を多くするか長期間の調査を行って、鳥相のうち飼鳥が含まれる割合を各地域で算出し比較する必要があるだろう。

3. 東京湾の鳥相との関係 (水鳥)

博物館周辺では 44 種 (32%) の水鳥が記録された。1 ha 程の小さな池で記録された種数にしてはかなりの多いといえよう。なぜであろうか。第一に、調査地が海岸に近いことがあげられる。海岸で採食するアカエリヒレアシシギやホオジロガモなど、本来内陸の池には見られないような種が記録されているからである。池上空を通過する種であっても、数回池を巡回してから移動する例が、カモメ類で記録されている。調査地の北に隣接した加曽利町で 1990 年 9 月 22 日にセグロアジサシ ♂ WP (CBMZB-1420) が保護されたこともある。さらに、中央区千葉寺町でも 1992 年 5 月 8 日にオーストンウミツバメが保護された (CBMZB-1600)、5 月 15 日にもハシボソミズナギドリが保護された (CBMZB-1709)。これらはほぼ完全に海上で生活する種であり、調査地が海岸に近いことがこれらの種が記録された原因の 1 つである。

しかしながら、調査地での水鳥の観察記録数は、単純に海岸に近いという理由では説明できないことが多いように思われる。千葉市内の埋立地の地先には、人工海岸や砂浜、テトラポットなどでは海岸で生活する鳥類が多数みられる。自然海岸が消失してしまった現在でも、東京湾海上の浅瀬で生活する鳥類は多く、全国的にみても有数の水鳥飛来地と言える。すなわち、単なる海岸ではなく、もともと水鳥の豊富な東京湾に近いという立地条件が重要なのである。

かつて東京湾には多くの水鳥が生活していた。水鳥の多くは干潟、湿地、草原や海上で採食や休息を行っていた。千葉市内でもカワウやサギ類が繁殖していた (斎藤, 1931, 1933, 1934)。このように、東京湾は日本有数の水鳥飛来地として有名な地域であった。しかし、これらの飛来地はそのほとんどが埋め立てられ、千葉市には自然海岸は残されていない。そればかり

か、かつて自然海岸に生息していた鳥類の観察記録は浦野 (1973) の記載しか残っていない。一見多いようにも思える観察記録は、自然愛好家が発行する同好会誌に掲載されているが、これらの記録は断片的である。そのため、埋立地では多くの水鳥や湿地や草原で生活する種が観察されているにもかかわらず、その生息状況が総括的にまとめられているとはいえない。千葉県や日本野鳥の会などが干潟に生息する鳥類についてとりまとめた報告書をもても、幕張海岸での水鳥の個体数や移動に関して断片的な観察記録が記載されているだけである (千葉県環境部自然保護課, 1982, 1986)。今後は、海岸部で生活していた鳥相の変化を生活環境の変遷とともに比較することにより、調査地の水鳥類の鳥相を考察する必要がある。

4. 今後の調査方法

これまで、繰り返し述べてきたことであるが、千葉市内の雑木林、水田や人里などの内陸の環境での観察記録は多いものの、その記録はほとんどまとめられていない。また、東京湾の水辺で生活する鳥類の生息地の多くは立入禁止の埋立地に隣接した地域であるため、調査には多くの障害がある。さらに、広大な埋立地で個体数や鳥相の調査を行うことは個人的な努力の範囲を超えている。報告書や観察資料が今までにほとんど公表されていないのは、これらの理由によると考えられる。今後は、調査地の他に海岸や内陸などに異なった地域に定点を決め、斎藤 (1939, 1940a, b, 1942, 1944a, b) が行った観察など過去の記録と比較する必要があるだろう。他の地域の鳥相と比較する上では、調査地以外での調査が不可欠である。

また、水鳥類の多くの種は長距離の渡りをする。調査地に生息する鳥類を考察する上では渡りという行動は無視できない。山階鳥類研究所標識研究室は環境庁から依頼されて鳥類標識調査を毎年行っている。標識調査について述べた報告をまとめた中に、1975 年 6 月 3 日に千葉市幕張埋立地でふ化直後に標識放鳥したコアジサシが、1975 年 12 月 9 日に 5000 km 離れたパプアニューギニアのガルフ地方で回収された記録が記載されている (茂田・桑原, 1992)。舟田池でも 1992~93 年にかけて、右脚に標識されたコアジサシが観察されているが、渡りのルートや池に飛来する個体の繁殖場所についてもほとんど調査されていない (桑原・箕輪ら, 1994)。夏鳥の多くの種で、個体数が減少しており、その個体数の減少が、調査地での旅鳥の減少の傾向を生み出している可能性がある。夏鳥や旅鳥の種構成や個体数の変化は、単一の調査地だけの結果から考察することは困難である。夏鳥や旅鳥の変化は広い地域での鳥相を把握する必要があり、その変化を把握するためには標識調査をさらに充実させる必要があるだろう。

謝 辞

本稿をまとめるにあたっては、千葉県野鳥の会の小倉正一、和仁道大、川名 興、桐原政志、田村 満、東邦大学野鳥の会の中山聖子、村上智紀の各氏には、観察記録の補足を、協和警備保証株式会社の池田安徳、平間雅雄、松村 勉、東京美装興業千葉営業所の幸島 栄の各氏には観察資料を提供していただいた。千葉県立中央博物館友の会の箕輪義隆、嶋田哲郎、綾富美子、阿部代始子、須田夕子、仁科研一、前田篤史、大塚直樹、若田部義夫、笹本みずほ、井尻謹絵、伊藤香、軽部嘉夫、花島宏明、熊谷健裕、上田智子、木村陽子、清野やよい、本村 健、金田彦太郎、斉藤映樹、千葉県立実務高校の越川重治、千葉県立中央博物館の大野啓一、小原千夏、山口 剛、寺村秀昭、吉村光敏、長谷川雅美、長谷川浩士、戸倉俊彦、米林 伸、中村俊彦、中村昭彦、由良 浩、小田島高之、倉西良一、林 紀男、林 浩二、大庭照代、萩野康則、高橋清美の各氏には、観察記録を提供していただいた。また、本稿をまとめるにあたっては横地留奈子氏の協力を得た。これらの方々に厚く感謝の意を表す。

引用文献

青木正志. 1989a. 舟田池周辺の鳥類調査. 昭和 63 年度千葉県立中央博物館自然誌資料調査・収集事業報告書: 18-30.
青木正志. 1989b. 千葉市青葉町舟田池周辺の鳥類. URBAN BIRDS 6(4): 80-84.
青木正志. 1989c 中央博物館のまわりの身近な鳥. 中央博物館だより 1: 3.
青木正志. 1990. 千葉市青葉町舟田池周辺の鳥類. 平成元年度標本資料収集動物・植物標本目録: 44-47. 千葉県自然誌資料調査会.
青木正志. 1991. 舟田池周辺の鳥類調査. 平成 2 年度標本資料収集動物・植物標本目録: 85-97. 千葉県自然誌資料調査会.
青木正志・和仁道大・原田 茂. 1992. 舟田池周辺・青葉の森・千城台野鳥観察園の鳥類調査. 平成 3 年度標本資料収集動物・植物標本目録: 74-111. 千葉県自然誌資料調査会.
青木正志・桑原和之. 1990. 千葉市近郊都市公園における鳥類相について. Jpn. J. Ornithol. 38: 181-182.
青木正志・桑原和之. 1991. 舟田池周辺の鳥類 1989 年 (千葉県立中央博物館周辺鳥類目録その 2). 千葉県生物誌 40(2): 27-36.
綾 富美子. 1994. オシドリ. 千葉県立中央博物館, 友の会ニュース. 20: 1.
千葉県. 1971. 千葉県鳥類目録. 134 pp. 千葉県. 千葉.
千葉県環境部自然保護課. 1982. 野生鳥類生息状況調査報告書 (昭和 56 年度). 121 pp. 千葉県. 千葉.
千葉県環境部自然保護課. 1986. 千葉県鳥類生息分布図作成調査報告書 92 pp. 千葉県. 千葉.
千葉県環境部自然保護課. 1990. ヤマドリ生息調査報告書. 22 pp. 千葉県. 千葉.
千葉県立中央博物館. 1990a. 千葉県立中央博物館生態園. アニマ 211: 107.

千葉県立中央博物館. 1990b. 生態園にカシラダカの群れが飛来. 中央博物館だより 5: 15.
千葉県立中央博物館. 1990c. 生態園のキジ. 中央博物館だより 6: 15.
千葉県立中央博物館. 1991. 鳥たちを身近に見れる舟田池. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 8: 6-7.
千葉市自然研究会. 1988. 千葉市自然ガイド・行こうさぐらう緑と水辺. 千葉市みどりの協会. 千葉.
原田 茂. 1992. 舟田池のカワウ. 千葉県立中央博物館友の会ニュース. 15: 5.
原田 茂・小倉正一. 1991. 生態園だより イワツバメ. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 10: 6.
唐沢孝一. 1984 舟田池とその周辺の鳥類. 千葉県立中央博物館 (仮称) 設置に係わる基礎調査及び資料収集事業報告書 (昭和 58 年度): 41-44.
唐沢孝一. 1987 舟田池とその周辺における鳥相の変化と鳥類の誘致. 千葉県立中央博物館 (仮称) 設置に係わる基礎調査及び資料収集事業報告書 (昭和 61 年度): 49-52.
唐沢孝一. 1989 スズメのお宿は街のなか. 260 pp. 中央公論社, 東京.
桐原政志. 1989 生態園での陸鳥変動の予測調査. 昭和 63 年度千葉県立中央博物館自然誌資料調査・収集事業報告書: 30-33.
桐原政志・青木正志・唐沢孝一. 1989 野鳥観察を有効に行うために. 昭和 63 年度千葉県立中央博物館自然誌資料調査・収集事業報告書: 184-185.
桐原政志・青木正志・桑原和之. 1989 舟田池周辺の鳥類 1982-1988 年 (千葉県立中央博物館周辺鳥類目録). 千葉県生物誌 39(1): 21-28.
桐原政志・唐沢孝一・岩本重治. 1988. 舟田池とその周辺の鳥類. 千葉県立中央博物館 (仮称) 設置に係わる基礎調査及び資料収集事業報告書 (昭和 62 年度): 45-53.
木幡冬樹. 1993. ツグミ属数種の越冬生態. 43 pp. 日本大学緑地環境保全コース森林保護ゼミナール.
桑原和之. 1990a 千葉市青葉町に現れたコイカル. 日本の生物 4(3): 78-79.
桑原和之. 1990b. 博物館周辺の鳥. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 5: 3.
桑原和之. 1991. ヒレンジャクとキツタ. Birder 5(6): 41.
桑原和之. 1992. 青葉の森の鳥たち. 中央博物館だより 11: 3-5.
桑原和之. 1993. 千葉市に生息する鳥類 I. 文献調査. 千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告. I: 259-267.
桑原和之・青木正志・桐原政志. 1991 千葉県立中央博物館周辺のスズメの個体数変動. 日本の生物 5(4): 38-49.
桑原和之・大野啓一. 1990. 青葉の森の鳥のおはなしー千葉県立中央博物館周辺の鳥ー. 28 pp. 千葉県立中央博物館. 千葉.
桑原和之・大野啓一. 1991. 野鳥観察ガイド. 生態園今のみどころ特集 1. 77 pp. 千葉県立中央博物館. 千葉.
桑原和之・箕輪義隆・嶋田哲郎・早川雅晴・赤井裕. 1994. コアジサシの生態. 千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告. II: 221-239.
桑原和之・和仁道大・木幡冬樹・原田茂・落合加代子. 1994. 千葉市に生息する鳥類 II. 千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告. II: 175-220.
箕輪義隆. 1991. ジョウビタキ. 中央博物館だより 8:13.
前田篤史・木幡冬樹. 1992. 舟田池から. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 1: 6-7.

- 村山茂樹. 1990 青葉の森の夜の話. 中央博物館だより 4: 12.
- 中安 均. 1988. 千葉市自然ガイド. 行こう. さぐろう 緑と水辺. 35 pp. 千葉市みどりの協会. 千葉.
- 日本野鳥の会. 1984. 日本の採鳥地 777 関東・中部編. 320 pp. 日本野鳥の会. 東京.
- 小倉正一. 1991. 渡り? . カワラヒワの大群. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 8: 3.
- 小倉正一. 1994. 鳥類. 千葉市自然生態観察公園候補地の自然環境調査報告書 (平成4年度): 144-157. 千葉市都市局公園緑地部緑政課. 千葉.
- 小倉正一・青木正志・田中正彦. 1991. II-4 鳥類. 千葉市加曽利貝塚遺跡周辺地域の自然環境調査報告書 (1990年度): 134-143. 千葉市都市局公園緑地部緑政課. 千葉.
- 小沼良子. 1991. Missing. 千葉県立中央博物館友の会ニュース 12: 7.
- 鶴見みや古・桑原和之. 1991. カゴから逃げたセキセイインコ. やましな鳥研ニュース 3(1): 3.
- 採集と飼育編集部. 1941. 農林省畜産試験場. 採集と飼育 3(11): 361-66.
- 斎藤源三郎. 1931. 大巖寺の鶴の観察. 鳥 32: 175-176.
- 斎藤源三郎. 1933. 再び大巖寺の鶴に就て. 鳥 36: 22-35.
- 斎藤源三郎. 1934. 大巖寺のサギ類. 鳥 38: 248-253.
- 斎藤源三郎. 1935. 千葉市内に於けるアマツバメの出現観察. 鳥 40: 510-514.
- 斎藤源三郎. 1937. 千葉市上空のアマツバメ (一). 鳥 45: 491-497.
- 斎藤源三郎. 1938a. 千葉市上空のアマツバメ (二). 鳥 10(46): 16-22.
- 斎藤源三郎. 1938b. 千葉市上空のアマツバメ (三). 鳥 10(48): 407-410.
- 斎藤源三郎. 1939. 千葉市を渡来する樞鳥 (一). 鳥 10(49): 615-619.
- 斎藤源三郎. 1940a. 千葉市を渡来する樞鳥 (二). 鳥 10(50): 725-733.
- 斎藤源三郎. 1940b. 千葉市の渡鳥の季節. 鳥 10(50): 733-737.
- 斎藤源三郎. 1941. 千葉市上空の雨燕 (四). 鳥 11(51・52): 143-146.
- 斎藤源三郎. 1942. 千葉市を渡来する樞鳥 (三). 鳥 11(53・54): 475-480.
- 斎藤源三郎. 1944a. 千葉市を渡来する樞鳥 (IV). 鳥 11(55): 692-698.
- 斎藤源三郎. 1944b. 千葉市を渡来する樞鳥 (V). 鳥 11(55): 698-703.
- 茂田良光・桑原和之. 1992. コアジサシの渡り. 日本鳥学

- 会 1992 年度大会要旨集. 118 pp. 大阪市立大. 大阪.
- 鳥根県立博物館. 1978. 伊達コレクション鳥類標本目録. 128 pp. 鳥根県立博物館. 松江.
- 須崎加代子. 1991. 舟田池のゴイサギ. 千葉, 中博, 友の会ニュース 10: 65
- 須田夕子. 1993. アジサシ. 友の会ニュース 16: 7.
- 鈴木 明. 1989. 千葉大学西千葉地区鳥類目録 (1973~1988). 千葉生物誌 39: 1-8.
- 浦野栄一郎. 1973. 千葉港の四季の鳥相. 千葉生物誌 22: 57-60.
- 和仁道大 1992. 千城台野鳥観察園の鳥類 1988~1990 年. 千葉生物誌 41(2): 65-69.
- 矢野幸夫. 1991. ヒヨドリと生野菜. 1991. 千葉, 中博, 友の会. 9: 6.

Avifauna of the Natural History Museum and Institute, Chiba, Central Japan

Kazuyuki Kuwabara¹⁾, Shigeru Harada²⁾,
Fuyuki Kohata²⁾, Akira Suzuki²⁾,
Masashi Aoki²⁾ and
Kayoko Ochiai²⁾

¹⁾ Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chiba 260, Japan

²⁾ Friends of the Natural History Museum and
Institute, Chiba, 955-2 Aoba-cho,
Chiba 260, Japan

From 1982 to 1993, 137 species of birds were recorded in and surrounding of the Natural History Museum and Institute, Chiba. During this period, there was constant ongoing construction work, and wild bird habitats were changing rapidly. For example, the Funada-ike Pond was drained in 1987, and as the pond began slowly filling, a shallow marsh-type habitat was created, which was used extensively by shorebirds and waders. As the water deepened, however, the habitat became more favorable to ducks and grebes. Terrestrial habitats underwent similar changes, but have stabilized considerably since 1992.